

金澤古蹟志卷十九

城南泉寺町筋

○蛤坂

舊名を妙慶寺坂と云ふ。改作所舊記に載せたる元祿十三年十二月金澤町奉行三輪七左衛門等の書簡に、犀川妙慶寺坂崩込に付、寺社奉行申談、窺之上、垣申付往來指止、在々より往來之牛馬、玉泉寺前より野町四丁目へ令往來候様御申付可有之。とありて、此の時代頃は妙慶寺坂と呼べり。蛤坂の名は、加藤惟寅の蘭山私記に、蛤坂は昔は往來のなき處也。先年千日町雨寶院より出火して、野町寺町焼失せり。其の節初て往來の坂となる。焼けて口が明くとの意にて、夫れより蛤坂の名起れりと云ふ。淺野茂枝云ふ。金澤の蛤坂は京都の蛤御門の名とひとし。蛤御門は常に通路を禁ぜられしかど、天明の禁裏御燒亡の時より往來す。焼けて口があきたりとして、蛤御門と呼べりとぞ。

○蛤坂來歴

龜尾記に云ふ。享保十八年四月廿八日犀川雨寶院より出火し、家數多く延焼に及ぶ。然るに今の蛤坂の所に通路なく、大に混雜して怪我人多くあり。故に火災後家屋を傍へ退かせ、川岸を築出し、一條の道路をひらき、同年七月朔日より通りはじむ。されば焼けて後口を開くといふ意にて、俗に蛤坂と呼べりと。按ずるに、往古泉野を開きし時より既に爰に通路ありしかど、元祿年間より漸く岸崩れ、通行もなりがたく、其の儘になり居し處、享保の火災につき、道路を開かれしなりといへり。一説に、昔は祇園の向うなる横町のみなりしといへるは過聞なるべしと。平次按ずるに、此の坂路は、延寶の金澤圖に、其の道路を圖したり。されば延寶以前より坂路ありし事いぢるし。さてその坂路の往來中絶せしは、前顯改作所舊記に載せたる元祿十三年十二月金澤町奉行の書簡に、犀川妙慶寺坂崩込に付、往來指止、牛馬通行玉泉寺前より野田へ令往來云々。と見ゆる時より止みたりしなるべし。天明六年妙慶寺由來書に、元和元年開基松平伯耆守自身指圖にて、川端に門前家